

「C 型肝炎」

大阪大学講師・第1内科 林 紀夫 編集
信州大学教授・第2内科 清澤 研道

日本赤十字社医療センター名誉院長

織 田 敏 次

医学書院からこの度、林紀夫、清澤研道両博士の編集による「C型肝炎」が上梓された。現在、活発に肝炎の臨床に専心しておられる両博士である。同好の士あい集い、現状がより克明にとらえられている。ぜひお薦めしたい。

国を挙げてのわが肝炎研究陣も、B型には一応のメドを……、さては非A非B型肝炎と、行政の支援もとつけた矢先の1988年秋、筆者に1通の招待状がカイロン社のRutter氏から届く。非A非B型肝炎ウイルスの診断法を開発したので評価してほしいと言われる。早速にNIHでの会合に向かうのだが、内心穏やかではない。しかし、本物ならば1日も早く手に入れなければならない。その秋にはRutter氏が来日し、西岡久壽彌博士とともにさるホテルで朝食をとりながら、交渉に熱が入る。おかげでC100-3抗体をいち早く手に入れ、数か月後にはわが国での全貌をほぼ把握し、輸血によるC型肝炎は激減、不幸中の幸いと言わねばなるまい。

それ以後のC型肝炎の成績が本書にはほぼすべて、要領よく網羅されている。

第1章には「C型肝炎ウイルスの基礎」。日本のHCV基礎研究グループのup to dateの研究成果が実にわかりやすく述べられている。わ

が国の研究陣のこれまでの生データをまとめて立派に構成されている。HCV研究の中で、日本の基礎研究グループが果たしてきた役割を客観的に知ることでもある。わが国の肝炎研究の土壌を感じさせられる。

第2章、第3章を構成しているのは、これらの基礎研究に裏打ちされて開発された新しい技術が成果を示す「C型肝炎の診断と疫学」、*“C型肝炎の病態”*である。新しい技術のcriticalなevaluation、そしてその技術を使って何がわかったか、それらはC型肝炎ウイルスおよびその感染症の理解にどのように結びつくのか、多岐にわたり記述されている。読みごたえのある章である。

ただこれらのデータもまた、常に新しいデータによって変わられるべきものである。C型肝炎ウイルス感染の最大の問題は、高い頻度の慢性化である。そしてウイルスこそ肝癌の元凶。なお、これには一段のブレークスルーが必要であり、人一倍それを認識している編者の意図を逆に感じることもできよう。

第4章、第5章は実際の臨床と治療法が詳述されている。特に患者のマネジメントについてきめ細かく書かれている、最前線に立つ若い臨床家には有用であることは言うまでもない。

それにつけても……。予研の宮村

達男博士がHoughtonとともに1982～1983年にかけて、設立間もないカイロン社に向かう。非A非B型肝炎の肝組織と正常な肝組織から各々RNAを採り、肝炎の組織のみに存在する特異的なRNAを“引き算”法により採り出そうとする。いくつかのクローンは採れたが、それはすべて細胞に由来するもの。志方俊夫教授から提供された貴重な日本のチンパンジーの肺組織からは、よいRNAが採れず、途中からCDCのBradleyと手を組み、キャリアチンパンジーの血漿からライブラリーをつくったところで宮村氏は日本に帰る。Houghtonはその後もひたすら、執拗に追い続ける。Kuoが加わりハイブリダイゼーションによる“引き算”ではなく、cDNAを発現させた蛋白を、患者の特異的な抗体によって分別し、ウイルスに特異的なRNAを採ろうと。Chooはライブラリーを……。ついに155塩基対の5-1-1クローンが採れた。

わが国の肝炎研究陣が積み重ねてきた研究成果を将来につなげるためにも、“元気を出そう日本”，改めて思うのである。

● B5 頁306 図127 写真18
カラー写真18 表67 1996 定価
11,330円(税込) 〒400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)